

F・W・パークー教授学の実践的觀点 —Quincy Method の解明—

高田喜久司

序 —問題の所在—

したがつて、アメリカ教育を根底から理解しようとするなら Quincy Method の果たした役割を無視する」とはできないのである。

アメリカにおけるロベルニクス的な学校改革は一八七五年、パークー (Parker, F. W., 1837-1902) がドイツをはじめヨーロッパ各地で吸収した諸原理⁽¹⁾を実際に応用するため、マサチューセッツ州クインシーの教育長 (superintendent of Quincy) に就任するなどによって開始されたといえよう。パークーがクインシーで五年間（一八七五—一八八〇）断行した学校改革は、一般に、Quincy Method あるいは Quincy Movement と称され⁽²⁾、注目を集めめた。Quincy Method はアメリカ最初の本格的な進歩主義教育運動として世界的な地位を占めるに至る。

周知のように、進歩主義教育あるいは新教育は、伝統的な教育と対決する点では共通性を有しているが、伝統的な教育批判の視点においては相違がある。パークーも例外ではない。デューイ (Dewey, J.) をして、「言葉の厳密な意味において、「進歩主義教育運動の眞の父」⁽³⁾と言わしめたパークーの生涯は、「いかに教えるか」すなわち、より良き教授学建設への献身だったといつても決して過言ではなかろう。

パークー教授学の詳細は、彼の三主要著書である「教授講話」（一八八二）、「地理学習法」（一八八九）、「教育

学講話】（一八九四）によつて知ることができる。しかし、これまでのわが国のパークー研究では、彼の理論が授業次元でどのように構想され、具体的に展開されたかに関する実践的観点を真正面から取り上げたものはほとんどないのが実情である。

【教授講話】のなかでパークーは、「応用されない理論は努力のない信念のようなものであるから、われわれは勇気をもつて発見した真理を実際面に適用しなければならない」⁽⁴⁾と訴えている。

」の主張から明らかなように、教授学の実践的観点を解明することは、パークー思想の研究を深化、発展させるうえで看過できないテーマであると考える。

以上の経緯から、基本資料であるパトリッジ(Patridge, Leria, E. Miss)著『The "Quincy Method" Illustrated』(一八八五、以下、」の書物を指す場合、『クインシー法』と略称)を手がかりとして、パークーの理論面を述べる。ところながら、やや実際面に多くの焦点を当てるQuincy Methodを解説したい。なお、【クインシー法】の構成、性格については徐々に説明を加えていくこととする。まことに、この間の事情を宇佐美寛は論文「J. M. ライスクールの実態を素描してみよう。」⁽⁵⁾と題する「スの公立学校調査」の中で、大要次のように述べている。

Quincy Method の理解をより確かなものにしてくれると考へるからである。

一、Quincyにおけるパークーの教授活動

パークーは近代教育思想⁽⁶⁾を根本精神においてとらえ、最善の特徴を反映した教育論を展開している。その理論の多くは、彼の手によって生き生きとした形で教室へ導入され、進歩主義教育運動の教育的信条となつて結実したものである。しかしながら、アメリカ社会全体の目覚しい発展を背景に、読・書・算の3Rsなどしまらず新しい教育内容が要求され始めたのは南北戦争後であった。教育内容あるいは教材過剰現象、さらには拙劣な教授法によつて当時の学校教育は極めて深刻なものとなつていった。ラッグ(Rugg, H.)によつて「教育」と「学校に通うこと」とは同義語である」と評されたのは一八九〇年代の学校であり、その教育内容は「教科目や教科書に盛られた知識―文字や記号―に関するもの」にとどまっていたのである。

それに、この間の事情を宇佐美寛は論文「J. M. ライスクールの実態を素描してみよう。」⁽⁵⁾と題する「スの公立学校調査」の中で、大要次のように述べている。

教育現実の最先端である教室の授業は多くの場合、無意味な事柄の丸暗記、無味乾燥で単純な反復練習、意図的な体系づけを欠いた單に因習的な教育内容で、機械的な教授法であった。さらに子どもが自分で考えることは無駄なことであり、教科内容としてあらかじめ決まっていることを覚え込ませるのは、時間と労力の経済になると考えられていた。教師がレディイメージの教育内容を与えるのであり、それは「ちえの源」なのだから、生徒はじつとして体を動かさずに、教師を見ていなければならなかつた。

当時の学校生活は、子どもたちが自由に活動し、会話をすることは許されないし、学校全体を自由に利用したり、学校のまわりの社会環境を有効に活用するような活動的な場とは考えられなかつたのである。いわんや、創造的な表現や情操的な態度はタブーでもあり、学校教育全体がきわめて貧弱なものとならざるを得なかつたことが容易に想像されるであろう。

一八九〇年をさかのばること二〇年、一八七〇年当時のクインシーの学校も他の諸学校と同様、日常生活とか離れた教育システム下におかれ、多くの欠陥が指摘されている。

学校の施設、設備は貧弱であり、地図、黒板、地球儀などの教具もない牢獄のような教室の中で、子どもたちはいつぱいになるのを待つて、「空の水差し(empty pitcher)」⁽⁹⁾と考えられ、教科書の抽象的事実、些末的な知識を注ぎ込まれていたのである。

その結果は一八七三年、学校評議員会(school committee)の学力調査にみられるように惨憺たるものであった。公立学校に八年間在学しても、たいていの子どもは読み、書きが満足にできない状態にあつたのである。文法を知っていても手紙は書けないし、たとえ教科書が読めたとしても、違う教材には困惑させられていた。また、手紙が書ける子どもであつても、その綴字法はでたらめであったという。

事態を重くみた教育委員会は素人(layman)ではなく、有能な教育専門家を見つけなければならぬとして一八七五年春、教育長選任特別委員会が設けられ、"The Boston Herald", "Boston Globe", "Boston Journal"誌上に教育長募集の広告を出したのである。多くの応募者の中から最後に三八歳のパーカーが残り、教育委員会のメンバーであるアダムズ(Adams, C. F. Jr.)と最終面接をすることとなつた。面接の結果、「鯨が上陸したぞ!」⁽¹⁰⁾

というキャッチフレーズのもと、パークーが教育長として採用されたのである。

教育長としてのパークーは、初等・中等・ハイスクールを含む八ヶ校の主として伝統的な教授法の改革を期待されての登場となつた⁽⁴⁾。彼は誠実かつ熱心な態度によつて着々と成果を積み重ねていく。一年も経たないうちにクインシーの学校の教師たちは、パークーの考え方と方法とをよく理解し、諸学校は大きく変貌したと、その実践に対して各界から賞賛された。

その若干の声をとりあげてみよう。当時マサチューセツツ州教育長であつたデッキンソン (Dickinson, H.) は、パークーの指導のもとにおかれていまつたといふに、学校は見違えるようになつてしまつたといい、さらには次のように述べている。

「初等学校については特に注目しなければならない。私が知つてゐる町や市の最も優秀な初等学校とクインシーの学校の方法と結果とを慎重に比較してみたのであるが、クインシーの学校が非常に優れているのに驚いてしまつた」⁽⁵⁾。

また、パークーがクインシーの学校を去つた後の教育委員会の報告書の中で、一人の教育委員は次のように書

いている。「五年間この町は信念あり、理解力あり、熱心な彼の恩恵に浴した。彼はこの町の公立学校が機械のような状態にあることを発見し、それらを生き生きとした有機体にした。すなわち、厳しい訓練は成長に道を開き、疲れ果てた牢獄は楽しい家庭のようになつた。教師としての彼のすぐれた知性と人間としての広い魅力が、彼の学校事業を形成したのである。彼はわれわれの教室に生み、成長、そして幸福を吹き込んだ。その結果は明白であり、確実である」⁽⁶⁾。

かくして、花崗岩の石切り生業者の多い、ボストン郊外のものさびしい田舎町クインシーは、今や「アメリカ教育のメッカ」として脚光を浴び、毎年三万人が学校視察にやってきて、事務当局や学校当局は、その応対についてこ舞いであつたと言う⁽⁷⁾。

それでは、パークーの教授活動はどのようなものであったのだろうか。後年、彼はクインシー時代を回顧して、次のように述べている⁽⁸⁾。

教育長としての私の仕事は、「教師の教師となること」である。しかし、教師たちを指導しようとしたが、彼らから学ぶことのほうがずっと多かった。そのため教育長としての権威を教師に託し、その代わりに、彼ら

に内容の充実した研究、独創的な考え方、観察、再構成、独立心を要求した。運動の中心は教員集会 (teacher's meeting) であった。その集会で、“See, Say, Use” といふ私の好きな言葉を黒板に書き、それを有機的な全体 (organic whole) にせよと訴えた。私は学校から学校へとまわり、教師をよく觀察し、一人ひとりを論評し、いろいろな問題について協議した。私は一つのモデルという理由からではなく、どのような教え方をしたらいいかを学びたいがゆえに、すべてのクラスで何度も教えた。それは多くの間違いや問題があつたけれども、愉快かつ楽しい仕事であった。粗雑・未熟な側面もあつたが、同時に進歩的なものでもあつたのである。

このような態度から彼は、教科書の抽象的な事実の記憶よりも実際の事物の研究を重視し、教授は地理あるいは理科に特に力を入れ、各教科の學習をそれに関連させて進めたのである。国語は観察や日常生活に基づくけれども、文法本位から内容本位に改め、算数も規則よりも事物によつて帰納的に進められた。そして、あらゆる學習は児童の興味、何よりも自己活動に訴え、教室を愉快な活動の場とし、学校を知識製造工場 (knowledge - mills)

から教育其同体 (educational communities)⁽¹⁾ へと変換せしめたのである。

教科内容の詳細な検討はしだいに明らかにしていくが、こゝでは一八七九年 N.E.A (全米教育協会) の大会で、パーカーの名前は「新しい教師 (new teacher) の模範⁽²⁾」として崇められるようになつたことを指摘しておきたい。しかし、こゝで重要なのは、パーカー自身はQuincy Methodを研究の精神 (a spirit of study) と呼ぶ、とにかく同意しないなら、「Quincy Method には新しいものは何もない」と言ふ、さらに次のよつた注目すべき発言をしている。

「Quincy Method は不斷の変化のことである。たいていの人々にとって教授の方法は物事を実行する確かな方法を意味するものであつて、固定され、完結されたものと考えられている。すなわち、完全で、ルーチン化した、万能薬であつて、投薬されると確実な結果を得る。このような意味での方法は、恐ろしい幻想である。…ただ、Quincy やつたことに最良の名前をつけて欲しいと言われるなら、私は子どもたちをより人間的に取り扱うことにだと答えるであろう。子ども、あるいは生徒としてではなく、人間として教えようとしたのである。子どもそれ

自身、個性を持ち、思考の流れ、希望や不安、喜びを持っている。学校においては子どもの思考が分離され、実際生活からかけ離れている。子どもは全般的でかつ完全な一つの生活をもつべきであり、家庭生活は互いに補い合わねばならない⁽¹⁾」。

ここで *Quincy Method* とは何かを究明し、それが新しいかどうかを判断しなければならない。その機は熟したようだ。

11. *Quincy Method* の内容と特質

それでは世界的な名声を勝ち得た *Quincy Method* (それは、パーカーにとって新しい原理や方法を導入した訳ではないし、特別の方法がある訳でもないと言うのだが) とはどのようなものだったのだろうか。

当時、パーカーの教授学に魅せられたベンシルバニア教員研修会 (*teacher's institute*) 講師パトリック・J・パーカーが指導した創造性に富むクインシーの実践を是非とも究明したい、と五回にわたりてクインシーを訪れた。女史は当局の暖かい配慮のもと、授業を観察したり、教員講習会 (*the weekly meetings of teachers*) に参加す

ることが許され、そこで経緯をノートに克明に記録したものである。その結果、滞在が終る頃には、クインシーの業績に関する豊富かつ膨大な資料を収集することができた。

【クインシー法】は、クインシーの諸学校で行われた授業の実際を収めた書物を出版したいという、ニューヨーク “School Journal” 編集長ケロッグ (Kellog, E. L.) の提案を受けて、パトリックが蓄えた資料を選択、配列し直し、パーカーの承認を得て⁽²⁾、一八八五年世間に問うたものである。

八節六六〇頁の大冊であるこの書物の構成は、第一学年から第四学年までの典型的な授業 (Typical teaching) が採録され、特に第一節から第五節までの第一学年の授業観察記録はほぼ完全な形態で述べられ、第六、七、八節は、それぞれ第一、二、三、四学年の授業記録が掲載されている。

(1) *Quincy* 事業の顯著な特徴

パトリックは、最初クインシーにやつてきた時の感想を、次のように記している。

「私はクインシーにやつってきた。教室は普通の初等学校

のそれと同じであつたが、教授法の性格には驚くべきものがある。

教授法は子どもの能力を開発することであつて、知識の獲得ではなかつた。それは自己活動によつて、精神的・道徳的、そして身体的な強さを得ることであつた。独特な道徳的動因として、作業を導入した作業による道徳教育があつた。それは道徳のための道徳ではなく、道徳を実践するための教育である。実際、教授法は幼稚園で行われるようなものであつた。これらの学校を二、三週間観察することによつて、「私は新しい、魅力ある」の教育の様相を研究し続けよう決心した⁽²⁾。

そして、女史はより良い教授法を渴望している教員たちから、クインシーの諸学校で見聞したことを話すように求められると、「クインシー事業の顯著な特徴」として次の二四項目を列挙して、その説明にあてたという。
(1) 学校生活の楽しさと、教師と子どもたちとの友だちのよき関係。
(2) (低学年では) グループ編成による個別指導の徹底。
(3) 多種多彩な“Busy Work”的有効な活用。
(4) 描画、造形、形、色、博物学 (natural history) など、普通には指導されない教科の授業。
(5) 表現の手段として描画が絶えず行われること。

(6) 教科書は知識の宝庫として活用される」と。

(7) 多種類の副読本 (supplementary reading) の導入。

(8) 子ども自身の創造的な思考表現が旧式の暗記による復誦にとつて代わること。

(9) 多様なプログラム—その配列は教師だけが知つていて、教師と子どもの双方を含む楽しい作業の雰囲気。

(10) (11) 不秩序が教師を悩ませたり、時間を浪費せたりすることはなかつた。

(12) 態度を特徴づける信用、礼儀、尊敬は、教師に対する生徒だけでなく、生徒に対する教師にもあつた。

(13) 叱責、鼻先であしらうような態度、猜疑心はなかつた。

(14) 威厳、冷静さがあり、子どもが内氣であるようなことはなかつた。

(15) 目標占は子どもであつて、Course of Study、試験あるいは進級にあるのではない。

(16) 諸計畫の経済性、自然性、実用性。

(17) いわゆるできの悪い生徒 (dull pupils) には特別の注意が払われた。

(18) 道徳的な力がはつきりと進歩したこと。
(19) 基本的な原理を理解している教師の優れた技能。

(20) 模倣者ではなく、教師の素晴らしい創造性と個性。

- (21) 教育長によつて示されてゐる高い理想と、それを実現するための教師の心からの協力。
- (22) 機械的なものではなく、固定あるいは命令された作業様式からの完全な自由。各教師は基本的な法則を犯さない限り、工夫したり、工夫するよう奨励された。
- (23) 試験は教師の教授能力をテストすることを目的とした。
- (24) 子どもの暗記能力ではなく、実行するための能力 (power to do) を測定するためのテスト。

項目を一瞥して明らかなるように、すでに述べてきた一八九〇年代の伝統的教育とは著しく趣きを異にしている教育状況が、パークー着任後のクインシーに見られたといえよう。まさに進歩主義教育のバイオニアにふさわしい内容を備えたものであり、パークーの努力を軽視することはできないのである。

これら項目に盛られた内容を筆者は、Quincy Method と言ひ换えているが、ここでは①直観教授の原理、② Busy Work の導入、③グループ編成による個別指導の徹底、④教科内容の統合の四項目に限定し、その特質を概観してみたいと思う。

なお、直観教授の原理は、二四項目には含まれていない原則であるが、【クインシー法】の至るところで取り上

げられてゐる基本原理と考へられるので、特に付加し、検討の対象としたものである。この四原理はクインシーリ・スクールの実践において重要な原理であるが、特に②と③についてはこれまでほとんど論議されることがなかったといえよう。

(2) 直観教授の原理

クインシーリ・スクールの授業は、直観教授あるいは实物教授 (object lessons) の原理によつて展開されている。この点について、パークーは次のように述べている。「守られるべき規則は『子どもの前に事物を置け』といふことである。子どもに可能な限り、事物を見させ、見たものを書かせよ。…あなたたちは子どもに従つて、子どもをあなたたに従わせるな。」のようになれば、子どもたちの觀察力は発達するであろう。換言するならば、あなたたは事物によつて問題をたずねるべきであるし、子どもは事物について答えるべきである。」

「事物から始めよ。これらの事物を教師は、子どもにとつて最も興味あるように選択せよ。次に教師は黒板にスケッチするであろう。スケッチすれば、子どもは描かれた物の名前と事物の関係を表す文章を連合するであろう。

一般に、実物を見る」とから獲得される思想は、より明白なものとなる。

伝統的な教授法にあっては、能力の開発 (generation of power) という思想は教師の精神の中ではなく、入学した時、子どもは何も知っていないものとされ、学校で最初に教授されたものは、子どもの性向を無視した読み方であった。クインシーではこうした考え方はすべて修正され、今や教師は自分の子どもを「可能性の束」(bundles of possibilities) とみなし、入学した時すでに子どもたちは、合自然の方法によって事実の蓄積があるものと考えられた。そして、蓄えられたものを確実にすることが教育であり、そのための手段が種々講じられたのである。その一つが直観教授である。教育開始のラウンドが入学以前にあるという原理の実践は、當時としては新しいものだったであろう。

このようにして、入学後六週間は諸学校とも一連の直観教授の名目で、「感覺を訓練する」とに中心がおかれ、思想の素材である感覚所産 (sense product) を正確かつ豊富にするよう授業は進められていった。したがって教師は既知と未知を区別できるよう、子どもの精神発達の法則を熟知することが要請され、読み方教授はあく

までも感覚訓練が十分なされた後の段階でおこなわれたのである。

(3) Busy Work の導入

次に、クインシー・スクールでは多種多彩な Busy Work が巧みに利用されていることを指摘しておかなければならぬ。

Busy Workとはグッド (Good, C. V.) によれば、「以前は初等学校の教師によって用いられた流行遅れの言葉であつて、教師があるグループを教授している間、他のグループに課せられたきつしり詰まつた課題」のことである。Busy Workは、当時広範囲に取り入れられていた教授法であり、ライス (Rice, J. M.) は、「われわれの都市の多くにおいては、Busy Workは子どもを忙しくしておく以上の益はあまりなく、子どもたちを度々ひどく苦しめるような性質のものである」と言う。

このよくな意味の典型的な例を引いてみよう。

「Little」という語を石板に書く課業であつたが、ある子は四回、その隣の子は三七回書いた。彼らは、どちらが速く、たくさん書けるかを競争したのである。彼らがあまり急いで書いたので、二〇回目くらいになると、どう見ても「little」という字には読めないくらい乱暴に

くずれた書ぶりであつた⁽²⁾」。

これに反し、クインシー・スクールに導入されたBusy Workは、もとと進歩的なものであつたと考えられる。パーカーは Busy Work を、「子どもたちが実行し得る、あるいは実行することを好むすべてのこと」を意味する概念として用いている。具体的には、たとえば「色のついたいろいろな長さの紙や木の葉を分類すること、種・ビーズ・豆・ボタンに糸を通すこと、ブロック遊びやカードで家を建てること、スレートあるいは黒板に絵を書いて、それを見たりすること、黒板に書いてある文字を写すこと、織物をしたり、エンドウ豆の種を蒔いたりする作業、等⁽³⁾」で、その数は無限であり、それがどの程度多様化しているかによって、教育実践の成功への鍵があるという。しかし、子どもたちの興味を削ぐ程の多様化は望ましい効果が得られず、目的を失うであろうと警告している。

Busy Work導入の目的は、①子どもにできるだけ忙しく活動させておくことと、②その活動を通して、「子どもに作業させ、作業する」とを愛し、組織的に作業することとを学ばせる」と⁽³⁾にある。したがって、「実行することによって、実行する」とを学ぶ」活動學習、あるいは総

合學習ともいえる Busy Work の思想を抜きにして、Quincy Method を理解しようとしても不可能である。

実際、一年生のあるクラスの午前の時間割をみると次のようになつておらず、三時間のうち、実際に五回の Busy Work が課せられているのである。

「祈りと歌唱—書き方—B. W. (描画) —会話—B. W. (pegs)—子どもたちが歌つてはいる時、教師はスレートの点検—色についての初步的な授業—B. W. (絵を見る)と—歌と行進—休憩—歌とスレート洗い—B. W. (pegs)—会話—B. W. (pegs)—子どもが歌つてはいる時、教師によるスレートの点検—直線を引く)と—言語授業—解散⁽³⁾」。

筆者は、デューイがいの Busy Work の思想を継承し、Occupation 概念へと発展させる、などいへ、生活主義的活動カリキュラムに結実させ、二〇世紀のプロジェクト運動に理論的背景を与える契機となつたものと考える。デューイは「仕事 (occupation) 」というのはなんらかの種類の Busy Work (せつせとやむ) と、つまり、子どもが机に座してはる時に、いたずらしたり、ほんやりしていないうようにするために子どもに与えられる何らかの課業を意味しているのではない⁽³⁾ 」と言い、さらに次のような occupation 概念を提示してはる。

「仕事 (occupation) と云ふ言葉によつて、私が意味するものは、子供がねむなう一種の活動であつて、それが社会生活において當まれるある形態の作業を再現したり、ないしそれと対応しておこなわれたりするもののことである。…これらの仕事は木片といろいろな道具を使う作業によつて、料理によつて、裁縫によつて、そしてまたノットに報告される織物作業によつて代表されている⁶⁾」。

デューリーの否定する Busy Work は、伝統的な教育に見られる Busy Work の概念であつて、パーカーが主張する Busy Work ではなかろう。もちろん、デューリーほどにはパーカーの論述は論理的・体系的ではないにしても、彼の Occupation とパーカーの Busy Work の近似性を否定する根拠は、今のところ発見することができない。Project Method の完成者であるキルバトリック (Kilpatrick, W. H.) は、「パーカーの講演を聞き、新教育運動についての関心を大いに高めた。それを契機に新教育運動に関するものを読んだが、とくに Quincy Method は私が『教育における展望』をもつて有益であった」と言わせるほどの示唆を受け、新教育運動の指導者としての活動に自信をもたせる發端となつたのである。⁷⁾しかし、「教育における新しい展望」をもつ

に至つた頃から、Project Method の思想的背景とその発想は形成されりつあつたと推測されるのである。パーカーの Busy Work 、デューリーの Occupation 、キルバトリックの Project Method への系譜は、現段階では筆者の仮説の域を脱し得ないが、ともあれ Quincy Method は歴史的な意義をもつものとして重要視されなければならないである。

(4) 徹底した個別指導形態

第三に指摘したい点は、クインシー・スクールではグループ編成による徹底した個別教説 (individual teaching) 形態がとられていることである。それは特に低学年において顯著であり、生徒は六グループに編成され、それぞれのグループは異なる学習過程を踏む。グループ編成は、精神的な作業態度によつて、聰明かつ機敏な生徒のグループと精神的な働きの鈍い生徒のグループに分けられている⁸⁾。時間的にみても子どもが一齊に受ける課業 (general exercise) は三分の一ほどであり、それ以外の時間はグループ毎に異なる作業あるいは、Busy Work が与えられている。

こうした形態をとる背景には、クインシーの学校がす

し詰め状態にある」と、ならびに子どもの精神的能力の個人差 (individual differences) があることへの対応策の一つとして考へられたようである。パトリックも、「全

体的に似かよつた才能をもつグループを編成すれば、教師は一人ひとりの生徒の成長を観察しやすいし、いわゆる「悪い子どもには、特別の注意を払うよい機会となる」と、その利点を指摘している。しかしながら、「クインシー法」の中に見られる授業観察記録は、すべて一育授業についてなされたものであり、グループ毎の授業の様子については、残念ながら、あまり明らかにすることができない。

(5) 教科内容の統合

すでに述べたように、当時の教育界にはさまざまな教育内容が要求され、いわゆる教材過剰現象が起こっていた。パークーは【教授講話】や【クインシー法】の至るところで、「経済的」あるいは「経済性」という概念を使用している。このことは教材過剰に対処する動機に呼応するものと推察され、その動機はまた教科内容統合の動機と相通する面をもつものと考えられる。

換言すれば、Quincy Method の特質は、伝統的な教科

の壁や仕切りを取り除き、相関・統合の形で指導されたということである。教科目は決してモザイクではなかつたのである。

子どもたちを野原や谷へ連れて行き、そして再び教室に戻ってくる。子どもたちは観察した事物を数え、量り、描き、粘土で型取り、さらに読んだり、書いたりする一連の活動が関連づけられていた。したがって、パークーにとっては多くの教育内容があることが問題ではなく、少しの真の教授が問題である。すなわち、「100の単語を不完全に教えようとするよりも、100の単語を徹底して教える方がずっと重要である¹⁴」。そのためには、一年間に教えるべき単語を慎重に選択することが重要となる。さらに、パークーは続けて、「非常にゆっくりと行うこと」が最も経済的である。もし、最初の学習が完全に行われるなら、その後の教授はほとんどあるいは全く必要がない¹⁵」とまで断言している。古い教育計画の中では、いろいろな教科を分離すること、つまり、読み方による読み方の教授、書き方による書き方教授などということは、時間と労苦という点で大きな浪費であり、教育学的な大失策なのである。パークーにあつては、分離はタブーとされた。

パーカーの唱える中心教科は、地理、歴史、理科を含めた広範囲にわたるものであり、これを内容教科、あるいは思想教科と呼び、思想教科は読・書・算の形式教科と結合してはじめて習得されると主張する。ただ、パーカーのクインシー時代には完全な意味での「中心統合理論」(the theory of concentration)は現れず、その萌芽形態として位置づけられたものである⁴³。ここで、一つのエピソードをあげておこう。

ある時アダムズとホール(Hall, G. S.)がクインシーや学校を訪問した。リクエストに応じてパーカーが授業をすることになった。その授業で、彼は子どもたちがまだ一度も見たことのないアヒルの剥製をもつてきた。パーカーは三年生の子どもたちに「アヒルについて知つてゐることを書きなさい」と發問した。子どもたちは先生の指示に従つて、剥製のアヒルのところへ行き、よく観察し、観察したことをスレートに書き、繰り、さらにつぐれた考えを書き表わした。訪問者は興味をもつて、その作業を見つめていた。そして、アダムズはパーカーの方を振り返つて、「あなたは博物学を教えているのですか」と尋ねた。「いいえ、これは言語の授業ですよ」とパーカーが答える。その背景には、ちょっととした思想があ

ったのだ…⁴⁴。

III. Quincy Method の具体的展開

（）まで述べてきた精神、すなわち Quincy Method を柱として、実際の授業が展開されている。「クインシーフ法】では一つの授業について、次のような構成がとられていることに留意しなければならない。
①授業の目標、
②教師の準備、③児童の準備、④授業計画、⑤一斉授業の展開、⑥注と批評。

なお、「教師の準備」は、授業成否の鍵であるとし、「児童の準備」は、「子どもたちがどんにいるのか」、すなわち教師は子どもの既存の知識を知らなければならないとされている。「授業計画」は、大筋は変更されないが、あまり重要なものはしばしば修正された。それは、「眞の教師は子どもを引っ張つていく」とをせず、彼らに従つていくからである⁴⁵と、それぞれに解説を加えている。

展開にあたつて、パーカーは、「これららの授業を真似るべきではない。模倣は決して創造にならないからである」と注意を与え、さらに「クインシーの教師たちは他人の

成果を模倣しないで、子どもの精神がどのように発達するかを研究し、彼ら自身の方法を発見したので驚くべき成果を得たのだ」とわれわれに奮起を促している。

紙数の関係もあり、ここでは植物学への導入として、子どもが持つてきた土の入った箱に種を植えつけ、それが成長するかどうかについて会話を主体にした授業（conversation lesson）が展開された第一学年の「植物の授業」（plant lesson）を典型的な事例としてとりあげてみたい。

「植物の授業」

(1) 授業の目標—①生徒に思想を喚起させ、思想の表現をおこなわせること。②子どもたちが植物生活の始まりについて知つてることを発見してやること。③成長する事物への興味を創造すること。

(2) 教師の準備—土の入った箱、物を入れたバスケット

を準備し、授業を概観すること。

(3) 児童の準備—成長する物について、過去において観察したことのすべて。

(4) 授業計画—①子どもたちに事物の名前をつけさせる、など。②子どもたちに生命あるものと生命のないもの

との区別をつけさせると。③子どもたちが植物を世話するように、自然に興味を持たせること。④それぞれのグループが一つの庭園を持てるよう箱を持つて来させること。

(5) 一斉授業の展開

（教師は小さなバスケットを抱え、テーブルの前に立つ。バスケットの中にはいろいろなものが入っている。テーブルの上には、土でいっぱいになつた木製の箱がある。教師 このバスケットの中には何が入っているか見てください。ハリー、前に出てきて私に教えてください。

ハリー とちの実、ゴムボール、貝、豆、トウモロコシ、リンゴの種、ペン、ドングリがあります。（ハリー、席に戻る）

教師 このテーブルの上にある箱に何が入っているか。スージー。

スージー 土です。

教師 先生が土をどこから手に入れたか分かりますか。

何人かの声 （即座に）ジョーがそれを持つてきました。

教師 ジョーはそれをどこから手に入れたでしょう。

ある声 家から。

他の声 ジョーのお父さんの庭からだよ。

教師 ジョー、あなたはそれを庭から手に入れましたか。

ジョー (大声で) そうです。

教師 私はどうしてそれを欲しがったか分かりますか。

生徒 花を咲かせたいのです。何か、植えるためです。

教師 教えましょう。先生は庭を作つて、バスケットの中

にあるものを植えようと思ひます。もし、先生がこ

れらを植えると成長するだろうと思う人は手をあげな

さい。(教室の中に手が挙がる)

アニー とちの実は成長します。

教師 どうして知つているの。

アニー 私はとちの実が成長するのを見たことがあります。

—中略—

教師 エナーにとちの実を植えてもらいましょう。(エデーは顔を興奮させて出てきて、指で穴を掘り、その中にとちの実を入れる。教室のどの子も息を殺して、その様子を見守つていた。) ルーシー、他に植えるものはありませんか。(ルーシーはトウモロコシを選びだし、

植える。)—中略—他に植えるものはありませんか。チャーリー、ここには植えるものは、もうありません。

教師 貝がありますよ。

チャーリー それは成長しません。

教師 ボールとペンもありますよ。

チャーリー それも成長しません。

教師 チャーリーは成長するものはないと言つていますが、皆さんはどうですか。バスケットの中には成長す

るものはないですか。

生徒 (再び声をそろえて、決めつけるように) 中には成長するものはありません。

教師 大変よろしい。それではこの箱を暗い物置におこう。

生徒 (即座に) それは窓のところにおかなければならぬ。

教師 (少し驚き、だがおだやかに) なぜ?

ある声 それは光があつた方がよいからです。

教師 もし、それに太陽があたれば土がかわいてしまう。

生徒 じゃ、水をやらなければならない。

教師 そうだ、水をやるのを忘れてしまつた。

—中略—

教師 この箱を世話するのは一班からやつてもらいましょう。もし、明日もう一つの箱が手に入つたら、それ

は二班からやつてもらおう。

—以下、略—

(6) 注と批評——この授業は、教師が生徒の前に立つて、いろいろな物の入ったバスケットを持って質問をしているだけであることをよく観察していただきたい。子どもたちがほとんど話をし、すべての作業をやつてしまつて、さらにこれから実行することも約束している。これで教師になり得ない人がありえようか。

この展開は、第一学年の「一連の直観授業」(a series of object lessons)として行われたものである。このシリーズの中には地理学への入門として、砂箱の中に丘を作り、水を注いで侵食作用を学習する「丘についての授業」(lesson upon the hill)、鉱物学入門として、クインシーで多く採石される花崗岩を取り上げ、長石、石英、雲母の三構成要素を知らせ、同時に父親がなぜ激しい労働をしなければならないのかを考えさせることによって、子どもに感謝の感覚を育てようとする「花崗岩の授業」(a lesson upon granite)がある。その他、身体、数、色、形、方位、広さなども直観教授の形態で教えられる。興味があるのは、意図的な授業とならんで「即興授業」(an impromptu lesson)も考慮され、子どもの前に馬が通ると、予定されたプログラムは変更され、動物学への

導入として馬の授業が取り上げられる」とある。^註 読み方、言語などの授業は直観授業の後に位置づけられていることに留意しなければならない。

第二学年では、前掲の「植物の授業」の発展として、「一連の植物授業」(a series of plant lessons)があり、豆を水に浸し、植える活動を通して、植物日記(plant diaries)をつけ、各成長段階の葉の様子を学習する配慮もなされている。さらに、両親が学校に関心を示してくれるよう、「乳牛」(Cow)を取り上げて、その有用性について両親の情報をもとに展開される「動物学」^註 も見られる。

第三学年の授業の特色は、算数入門や地理学読本として「ロビンソンクルーソー」を使つた授業が導入されていることである。

第四学年では、実際作業に基づく算数、地理学と歴史学の連合学習(combination lesson)が注目される。^註 特に連合学習は、詩を作る」と、地理学ソングを歌う」と、体操をすること、読み方の復習、ピューリタンを親切にしたインディアンの記事を読むこと、ここで討論すべき主題を決定し、インディアンの衣・食・住・武器・家具を描き、粘土で型取ることと、白人がインディアンを追い

出したことを認めさせ、利口主義者を懲らしめる」と、最後に Black Hawk の話を子どもたちにして終わるという授業計画となっている。そこでねらっている授業の目標は、「品性を陶冶し、これを実践に移すこと」という記述が見られる。

【クインシー法】には、「こうした多種多様な授業の展開例が実に七〇例近くもあり、クインシーにおける子ども達の姿や教室の雰囲気を鮮明にキャッチできるのである。

具体的な展開例として取り上げた「植物の授業」と、今日実践されている授業とを比較した場合、両者の酷似性に驚かされる。しかし、前者がおよそ一二〇年程前の実践であることを想起するなら、クインシーの授業内容の進歩性を容易に指摘できるのである。

わが国の教育界では、授業分析が活況を呈し、多数の教師が実践の成果を確かめるため日夜、エネルギーを傾注している。この授業分析の先駆を筆者は、この【クインシー法】に求めるものである。授業分析の手法は、今日とは異なっているが、「授業の目標」から「注と批評」に至るまで、実に組織だった授業が展開されているからである。さらに、教育実践の本質を解明するため、五回も同一地区を訪問し、第一学年の第一日目から第四学年

の終わりまで、およそ七〇編六六〇頁のボリュームをもつ実際の授業例が公刊された文献に接することはなかつた。その意味で【クインシー法】は、今日でも看過できない、重要な価値を有する授業観察記録書であるといえよう。

結語

パークーが Quincy Method には、「新しいものがない」と言つたのは、今までの検討から明らかのように、その実践が進歩的であるがゆえに首肯できないのである。それは、おそらく、パークーの謙虚な態度から出た言葉であつて、またクレミン (Cremin, L. A.) が指摘するように、多くの人々がクインシーを訪れるその空騒ぎ (fuss) に對して発せられたものと解したい⁵⁰。

Quincy Method には非難がなかつたわけではない。パークーはクインシーの諸学校を泥まんじゅう生産工場 (mud-pie factories) に変えてしまつたという批判⁵¹、さらには基礎学力の低下を訴えるものもいた。理想追究と諸原理の適用において堅い決心を持つパークーは、それらの非難に對して敢然と立ち向かつていった。

そして何よりもマサチューセッツ州教育委員会の調査によつて、クインシーの子どもたちは伝統的教育によつて訓練された学校より、読・書・綴字において非常に優れており、一番出来の悪かつた算数でもカウンティで四番目に位置しているという結果によつて、その優秀性が立証されたのである^⑤。したがつて、こうした非難は比較的簡単に追いやられ、逆に Quincy Method の名声を高める役割を果たしたといえよう。

最後に、今後の課題を含め、Quincy Method について整理してみたい。

①【クインシー法】に採録された授業の実態は、非常に進歩的なものであつて、今日の授業分析、授業研究の先駆となるものである」と。

②クインシー・スクールは、教材よりも子どもの優位性を強調する「児童中心学校」であつて、教授・学習過程は子どもの作業あるいは活動によつて展開されていふといふ。

③子どもの創造的な思考の表現活動が重視され、個人差への配慮が見られる」と。

④直観教授の原理によつて授業が展開されており、児童に教科の関連づけ、統合の考え方がある」と。

⑤授業においては子どもが前面に出るよう工夫がなされ、教師の直接指導は比較的差し控えられていること。

⑥パークーは一八八三年から一八九九年までタック郡師範学校 (Cook County Normal School) の校長として活躍する。一般に、その実践は Quincy Method の発展と考へられてゐる。兩者を検討する」といふべく、パークー教育思想の諸原理を「Parker Method」ふくらえ直してみたい。

⑦パークーが活躍した時期は、アメリカ教育史上、近代的な公教育制度の成立と拡充の時代として位置づけられていることから、パークー教授学の歴史的・社会的・政治的な側面等からの検討も意図してみたい。

〔注〕

- (1) Curti, M.; *The Social Ideas of American Educators*: 1968, p.379 パークーは一八七一年より一八年半をイギリス留学し、ベルリン大学で哲学、歴史、心理学、教育学を研究した。留学時代のパークーはヘーゲルを読み、ヘルバート派の人たちと親しくなつたが、彼の教育思想に深い影響を与えたのは、ペスタロッチ派のディー

ステルヴォーク、リッター、それにハーメルの思想

であった。また、彼はオランダ、イタリー、スペイン、

フランス、ドイツの各地を広く旅行し、最も進歩的な

諸学校を訪問している。

(2) 「クィンシー・システム」(Quincy System)あるこ
は「新」^{シニ}系統 (New Departure) ^{シニ}の翻訳である。

(3) Cremin, L. A.: The Transformation of the School-
Progressivism in American Educators 1876-1957-
1961, p. 129.

(4) Campbell, J. K.; Colonel Francis Wayland Parker-
The Children's Crusader, 1857, p. 140.

(5) Comenius (1592-1670), Pestalozzi (1764-1827),
Herbart (1776-1841), Froebel (1782-1852) などの教育思
想家一般は、方法はペグタル・ハサ、児童觀はハーメル
ル、中心統合概念はグルバールトから影響を受けたと謂
われてゐる。

(6) Rugg, H.: Foundations for American Education,
1947, p. 523.

(7) Ibid; p. 524.

(8) 梅根梧監修『アメリカ教育史一』(世界教育史研究

会編・世界教育史体系一七)講談社、一九七五 11110

- 111 | 国際

(9) Parker, F. W.; Notes of Talks on Teaching, reported
by L. E. Partridge (8th ed.) 1885, p. 19
アメリカ第1代大統領 John Adams の孫息子。なほ、
第一代曰、第六代曰 (John Quincy Adams) 大統領が
出でるやうなやう Quincy は「Adams の土地」を有す
ねつた。(cf. Campbell; Ibid, p. 75)

(10) Slade, J. H.; Finding Colonel Parker "Journal of
Education" 51 (April 26, 1900) p. 260
元來、教師の指導は校長の仕事であつたが、この制
度も教育委員会制度が成立するにしたがつて、教育長
の手に移つてゐた。しかゞ、ハーメルのシステムは過
渡的なものであつた。(O.E. 前掲『アメリカ教育史
一』 117-1 頁)

(11) Partridge, L. E.; The "Quincy Methods" illustrated;
1885, p. xi. なほ、この書物は、発行された一八八五年
中止せられたが、その書籍は、現在存続しておらぬ。

(12) Parker, F. W.; Ibid, p. xvii

(13) Curti, M.; Ibid, p. 384

(14) F. W. Parker; "The Quincy Method" The Journal of
Sociology Vol. 6, July 1900-May 1901; Campbell, J. K.;

Ibid p. 80 等。³⁶

⑤ Dangler, E.; "From Quincy To Chicago-American Comenius", Harvard Educational Review, Vol. 13 January 1943, p. 20.

(18) Campbell, J. K.; Ibid, p. 87.

(19) Parker, F. W.; "The Quincy Method"; Ibid, pp. 117-119.
⑥⑦ Patridge, L. E.; Ibid, p. xii.

⑧ Patridge, L. E.; Ibid, pp. xii-xiii.

⑨ Patridge, L. E.; Ibid, p. xii.

⑩ Patridge, L. E.; Ibid, pp. 86-87.

⑪ Parker, F. W.; Ibid, pp. 3-34.

⑫ Patridge, L. E.; Ibid, p. 7.

⑬ Patridge, L. E.; Ibid, p. 48.

⑭ Good, C. V.; Dictionary of Education(3ed), 1973, p. 76

⑮ 『前掲「トマスカ教育史」』母体美術館蔵文庫(1991)所載。

⑯ 『前掲』。

⑰ Patridge, L. E.; Ibid, pp. 33-34.

⑱ Patridge, L. E.; Ibid, p. 43 等。B. W. Busy Work

⑲ 『前掲』。

⑳ Dewey, J.; School and Society, Phoenix Books, p.

133 : 西原誠一著「学校と社会」筑波文庫、1985年〇

⑳ 『前掲』。

(36) キルバートリック著村山貞雄、市村尚久訳「教育哲學

① 明治図書、1999年販、1141頁。

② Patridge, L. E.; Ibid, p. 4 筆者はバーカーの愛弟子

であるウォッシュバーンが、後年の「個別教授」に

シナジーを得て、それを徹底化して「ウイネットカ・システム」を作り上げたのではなくかと考へる。それは、

①彼の母は、特にバーカーと親しい友人であり、バーカーの教育事業に協力していた。②ウォッシュバーンはバーカーが校長であった Cook County Normal

School の附属学校に入学して卒業。③「バーカーの影響は意図的ではなくにせよ、ウイネットカを覆つて

おり、ウイネットカの学校が明確な目標を見失ってしまったのにならようじやせている」とを述べている。

④(19)E. 三口満「ウォッシュバーンの理論」金子孫市監修「現代教育理論の歴史」(ハヤカワ) ハヤカワ社、七九頁)と(2)(19)の理由からである。この考え方を確たるものとするには、まだ時間を必要とする。

歴史の発展と社会問題。

- (42) Parker, F. W.; "The Quincy Method" p. 119.
- (43) Patridge, L. E.; Ibid, p. xvi.
- (44) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 87-90.
- (45) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 49-118.
- (46) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 91-96.
- (47) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 97-102.
- (48) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 30-63.
- (49) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 36-354.
- (50) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 330-335.
- (51) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 549-533.
- (52) Patridge, L. E.; Ibid, pp. 631-640.
- (53) Patridge, L. E.; Ibid, p. 130.
- (54) Cremin, L. A.; Ibid, p. 388.
Brubacher, J. S.; A History of the Problems of
Education (2nd ed.), 1966, p. 388.